１３．保存された鉄橋を中心とするコミュニティ作りの研究

鬼淵鉄橋を残す会
（長野県木曽郡）

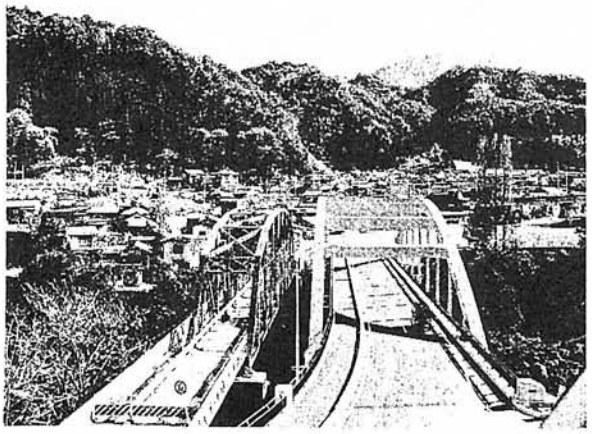
１．活動の背景と目的

＜日本最大の森林鉄道の保存と活用＞

長野県木曽郡上松町は大正時代の中頃から、木曽森林鉄道の基地として発展してきた町です。上松町の木曽川にかかる、「鬼淵鉄橋」は、木曽ヒノキを運ぶ玄関としての鉄橋でした。

昭和５０年日本で一番最後まで運行していた木曽森林鉄道王滝線のフィナーレはこの鬼淵鉄橋々上で行われるなど、まさに木曽森林鉄道のシンボルでした。

その後平成９年まで鬼淵鉄橋は町道として使用され、川下に長野県道木曽川右岸道路が建設され撤去されることになりました。



鬼淵鉄橋（左側の鉄橋）

私共は平成９年９月「鬼淵鉄橋を残す会」を作り保存運動を行いました。当時（あるいは平成１２年現在でも）、この「鬼淵鉄橋」は表向きには「不要、必要なし」と意見が町の8割以上を占めています。ところが私共が保存運動を始めると将来国の重要文化財クラスとなるこの鉄橋の文化的価値と、日本の国有林のシンボルとして残してほしい、上松町内の観光の対象物として残してほしい、という「水面下の声」が多数寄せられました。はっきり物が言えない町の姿です。

結局最後は佐々木金三町長が「鬼淵鉄橋は重要な鉄橋ゆえ取り壊さない」との決断で残されることになりました。

＜鬼淵鉄橋を上松町の町おこしにどのように活用するか＞

保存運動から一年後、表面的には静かになりましたので、この「鬼淵鉄橋」を上松町の町おこし、コミュニティ作りにどう活かしていくか、利用していくかということを表立って調査、研究をしていこうという動きを起こした矢先、財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団から研究助成をいただくことが出来ました。

ただ追い風になったのは、平成１１年暮れ、国道１９号線の上松バイパスが開通し、上松町の中心街へ車が通過しなくなったことです。いわゆる「車のルートからはずれ地盤沈下を起こした町」。となってしまったことです。更に悲劇というべきは、明治３０年代から続いて来た、「営林署」が消えたということです。営林署は、木材生産、いわゆる木曽ヒノキを伐って販売し収益を上げる。という機能を持っていましたが、改革後は、森林の保護が強くなり、販売、収益がいままでのように機能出来なくなったことです。

これによって、「木曽ヒノキの企業城下町」は倒産と同じ状況になってしまいました。その木曽ヒノキの企業城下町をどのように再生させるかも活動の背景にありました。

II．活動の内容

活動は「鬼淵鉄橋を残す会」の会員を中心として、新しく町内、町外からメンバーを募集することになりました。チラシを約３００枚作り、町内へ配布しました。私共が最も期待したのは、役場職員、町会議員、商工会、営林署のＯＢの方々でした。チラシも３回程関係先へ配布し参加をお願いしました。その結果、公民館での月一回（５月～１２年１月）の会合に出席した方は、町役場職員０人、町会議員２人、商工会１人、営林署ＯＢ０人という結果でした。

町外からは３人でした。ところがこれらの方々が１０人力、２０人力、という大きな力となって重要な意見を出してくれました。

また活動は、町外の楯英雄（出身は上松町）が中心となって行い、町内の関係者１人、２人という小単位で話し合いを持ち、その人数は延べ１００人前後に上がっております。

また、「鬼淵鉄橋」周辺の木曽川整備に、「炭ガマ」を作りたい。ということで、そのメンバーが２０人近く集まっていただきました。

鬼淵鉄橋（手前の橋）と上松町

そして愛知県段戸山々中への研究に参加し指導を受けて来ました。このような研究会、コミュニティ作りのための会合、そして個々の意見を集約しその具体策をまとめました。また楯英雄は、町内の八十二銀行上松支店のロビーで「俳句、短歌を原点とした、上松町の町づくり試案。俳句に見る上松町」というタイトルで約１ヶ月にわたって、俳句の展覧会を行い、合わせて「コミュニティ作りの協力」を呼びかけました。

III．活動の効果及び今後の課題

＜研究活動の効果＞

一年近くにわたる話し合い、現場の踏査の結果、『保存された鬼淵鉄橋を中心とするコミュニティ作りの研究』（Ａ５版、１１０ページ）の研究報告書を発刊しました。内容は非常に多岐にわたっております。特に町外者の和田重郎氏から、木曽森林鉄道の貨車などのあらゆるものを鬼淵鉄橋から約３００メートル町寄り、上松町の中心地に近い場所に集める。そして上松町が、木曽の森林鉄道の中心地であったことをしめす、「博物館的な施設を作る」という提案が出されました。

町の中心地に歴史的、観光的施設を作っておかなければまちの商店街は繁栄しないという論理が展開されました。

町外の篠崎信雄氏からは、「上松町の町おこし、コミュニティ作りに沢田正春先生の思想を基本としてほしい」という強い要望が出されました。沢田正春氏は兵庫県八鹿町の出身。昭和32年に水力発電所の土木工事の労働者として木曽に赴任。はげしい労働のあいまに、木曽の人たちがまったく見向きもしなかった、「中山道、木曽街道の歴史文化、街道文化」を、写真と美しい詩的リリシズムで歌い上げ、『木曽路』三部作（東京、木耳社刊）を発刊した方であります。

この『木曽路』三部作の写真文集は昭和４０年代の木曽妻籠宿復元、木曽路観光の先駆けをなしたものです。沢田正春さんは「木曽路観光は江戸時代の木曽路をいかに残すか、また保存するかが原点」としております。この沢田正春さんの木曽路観光のあり方を上松町は、上松町のコミュニティ作りの原点とすべきであることを篠崎信雄氏は述べております。

＜上松町のコミュニティ作りの今後の課題＞

Ａ５版１１０ページの研究報告書は、いままで上松町では行政、民間を問わず、まったく発刊されなかったものです。

上松町に限らず木曽谷１１ヶ町村は、過去１０年以上にわたって莫大な、それこそ莫大な費用をかけ、講演会、シンポジウムなどを何十回となく行って来ました。特に長野県の木曽の出先機関である、木曽地方事務所や、木曽広域行政事務組合が主催するものは、２００人、３００人という動員数です。ところが動員される側は、行政、議会、商工会などの関係者が９割を占めております。

また、動員という上からの命令的なもので参加者は自主的参加でないため、結局具体的な結果は出ません。講師の方々も木曽谷の実情を十分理解していないため講演の内容は乏しいものばかりです。

これが木曽に限らず行政がいままで行って来た地方の「ムラおこし」の実態であると思います。これは地域おこしの大きなマイナスです。

私共は平成１１年度は上松町のコミュニティ作りのテキストを作り、一つの指針を作りました。この一つ一つの指針を行政、商工会、観光協会、町議会、公民館などの会合のテキストとして使っていただき、具体的なコミュニティ作りに生かしていくつもりです。

かつての木曽ヒノキの城下町が没落した町、中心部を遠く離れた上松バイパスの開通、上松町にとってすべてマイナスばかりの昨今の厳しい情勢です。このような逆境の中で、今回助成金をいただいたことに感謝します。

＜今後の友好関係を＞

この一年間コミュニティ作りの研究に追われ他の団体との交流はまったく出来ませんでした。今回の助成事業をきっかけとして交流を続けて行きたいと思います。また私共の木曽上松町の「鬼淵鉄橋」の見学等に是非おいでいただき御指導、交流を切にお願い致します。

保存された鬼淵鉄橋を中心とするコミュニティ作りの研究
A5版　110Ｐ　送料込み1000円
代金分の切手を同封の上、お申し込み下さい
（申込先、問い合わせ先は８７頁を参照下さい）